様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００７４

研究課題名（和文）欠巻部分を持つ平安後期文学の研究

研究課題名（英文）The narratives that have some missing parts or volumes in the first half or end of the story ,in the late Heian period .

研究代表者
高橋　早苗（鈴木早苗）（TAKAHASHI, SANAE）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：１０６２５１２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：平安後期物語である『浜松中納言物語』『夜の寝覚』は、物語の前半や結末に欠巻を抱える物語である。本研究の目的は、外部資料を精読し、平安後期文学の欠巻部分の内容を見定めることを通して、現存部分と欠巻部分を統括的な視点で捉えなおすことである。考察を進めた結果、現存部分のみを対象とした断片的な考察では見えてこなかった物語の特質を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Hamamatsu Chunagon Monogatari and Yoru no Nezame in the late Heian period are the narratives that have some missing parts or volumes in the first half or end of the story.The purpose of the present research is to make sure of what the contents of those missing parts or volumes would be like through close reading of the external related documents, to integrate the existing and missing parts or volumes in a subtle way and put them in a new and broader perspective. As a result of the research, characteristics of the narratives in an integrated form, which could not be perceived by any traditional approaches based upon the existing fragments, have become clear.

研究分野：国文学

キーワード：寝覚　王朝物語　平安後期文学　欠巻

１．研究開始当初の背景

平安王朝物語の研究は、１１世紀前半に登場した『源氏物語』を中心に行われているといってよい。報告者もまた、『源氏物語』において「たぐひなし」「枯る」といった表現が特徴的に用いられている点に目を向けることで、作品内部における緊密な表現意識に注目し、分析を行ってきた。また『源氏物語』における『史記』『白氏文集』などの漢籍受容や『竹取物語』『伊勢物語』など平安前期物語の受容といった問題をとりあげて、『源氏物語』の達成したものの内実について検討を加えてきた。さらに、このように『源氏物語』の特質を様々に論じることで、王朝物語史上における『源氏物語』の意義付けをも行うことができた。だが、こうした過程で、のちに登場する王朝物語群（いわゆる１１世紀後半に登場する平安後期物語）もそれぞれ固有の物語世界を構築しており、それらを深く探る段階にきているのではないかと考えるようになった。

もっとも近年では、『源氏物語』のみに偏らず、１１世紀後半に成立した『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』といったいわゆる平安後期物語への検討・分析は進んでいる。だが、平安後期物語は、その特異な性質ゆえにいまだ研究の進んでいない点があることは見過ごせない。詳細は後述するが、これらの作品は一見すると物語として不適格とも言われ得る問題をはらんでいる。それゆえ『源氏物語』ほど多岐にわたる成果が得られていないと思われ、研究の必要性を痛感することとなった。

２．研究の目的

本研究の題目は「欠巻部分を持つ平安後期文学の研究」である。ここでいう平安後期文学とは、１１世紀後半に成立した『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』をさす。これら平安後期物語はいずれも、物語としてはいわば不適格と言われかねない、特異な特徴をもっている。すなわち『狭衣物語』は異同の多い作品であり、諸本によって表現に大きな違いが見られる。また『浜松中納言物語』には冒頭部分がなく、『夜の寝覚』は中間部分と末尾部分を失っているのである。

これらの作品は、従来『源氏物語』にくらべ多角的に論じられることが多くはなかった。近年、こうした傾向とは異なる動きが出てきており、たとえば 2000 年から定期的に刊行された『論叢 狭衣物語』（新典社、1～4巻刊行）は近年の成果の一つである。一方、『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』はテキストに欠落があるという致命的な状態にあったため、この二作品の研究は、現存する巻の記述内容と『無名草子』などの外部資料から、失われた巻の内容の一端を明らかにすることから始まり、作品世界の検討はおのずと現存部分に限定されることとなった。

このように、物語の前半や後半に欠巻を抱える『浜松中言物語』や『夜の寝覚』は、往々にして現存部分のみを対象とし、断片的な考察にとどまりがちである。むろん、現存部分のみを対象としたすぐれた研究の成果はいくつか発表されており、そのように現存する本文テキストのみを対象として論ずることは、作品に対して極めて誠実な研究姿勢だと言える。だが、欠巻部分の内容を踏まえるか否かで物語の相貌が大きく変わり、ひいては文学史の様相も変容する可能性を思えば、『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』の研究の偏りは見過ごせないものがある。

本研究の目的は、平安後期物語のうち、『夜の寝覚』に焦点を当て、『夜の寝覚』の現存部分と欠巻部分を、統括的な視点から捉え直すことである。

３．研究の方法

平安後期文学の一つである『夜の寝覚』を中心にとりあげる。『夜の寝覚』は外部資料により、失われた中間部分と末尾部分の概要を知ることのできる希有な作品である。そこでまずは、欠巻部分の内容を見定めるために外部資料を精読することを試みる。

具体的には、外部資料は①『夜の寝覚』を取り上げた他作品、②『夜の寝覚』の二次作品、③『夜の寝覚』の断簡と、以下のように分類できる。

①『夜の寝覚』を取り上げた他作品

鎌倉初期に成立したとされる『拾遺百番歌合』（『物語二百番歌合』のうち後に成立した百番歌合のこと）や『無名草子』、１３世紀の成立が確認される『風葉和歌集』を精読する。『拾遺百番歌合』『風葉和歌集』などの和歌集は『夜の寝覚』に詠まれた和歌やその状況を示す詞書をそなえており、また『無名草子』は物語評論書として『夜の寝覚』をとりあげている。これらによって『夜の寝覚』の断片を捉えうる。

②『夜の寝覚』の二次作品

また『夜の寝覚』の改作本である『夜寝覚物語』は大幅に筋を変えていくが途中までは『夜の寝覚』と同様の筋をたどる。また大和文華館に収められた『寝覚物語絵巻』は失われた末尾の内容を絵画化したものであり、そこには詞書がついており、場面状況などが説明されている。よって、『夜寝覚物語』と『寝覚物語絵巻』詞書によって、『夜の寝覚』の中間部分と欠巻部分の概要をある程度まとまった形で把握することができる。

③『夜の寝覚』の断簡

さらに『夜の寝覚』の失われた一部が断片的であるとはいえ存在することを見過ごすわけにはいくまい。『夜の寝覚』の和歌や文

章を随時抜き出して書き散らした『夜寝覚抜書』の発見や、伝慈円筆断簡や伝後光厳院筆断簡などの出現の意味は非常に大きい。これらによって、作品の概要に留まらず、作品の本文自体を確認することが可能となった。

以上の①②③をもとに、それぞれの特徴をふまえたうえで検討を行うことで欠巻部分の内容について考察を深め、そのうえで、現存部分と欠巻部分を統括的に捉えるための分析視点を獲得し、『夜の寝覚』の検討を進めていく。

４．研究成果

『夜の寝覚』を詳細に検討・分析した結果、以下のような成果を大きく２点得ることができた。

（１）作品内部の検討

複数の外部資料を精読し、『夜の寝覚』の欠巻部分の内容を概要だけでなく表現レベルでおさえた結果、「とづ（閉づ）」を基点として、冒頭部分とのちの展開の関わりについての考察を深めることができた。以下の成果は「『夜の寝覚』冒頭部分の和歌とのちの展開―『竹取物語』を契機として―」（『国語と国文学』92）にまとめたものである。

『夜の寝覚』の冒頭部分（特に三年間にわたる天人のエピソード）は、作品の主題や構想を示すものとして注目されてきた。とはいえ、一年目二年目と違って天人が現れないことを語る三年目については、これまでほとんど論じられてこなかった。だがこの場面において寝覚の上が初めて詠む和歌（後述）に着目したとき、この場面が予言的役割を担って、（欠巻部分をも含む）後の物語展開と有機的に連繋していることが明らかとなる。

具体的には、まず冒頭部分の三年目に寝覚の上が詠んだ「天の原雲のかよひ路とぢてけり月の都のひとも問ひこず」の歌に着目する。この歌が、寝覚の上が物語において最初に詠んだ和歌であるのみならず、「月の都のひと」といった表現により先行する物語の存在を示唆していることは見過ごせない。すなわちこの歌は、「もの思ひ」とは無縁の存在である「月の都のひと」が登場する『竹取物語』との関係を抜きに読み解くわけにはいかないのである。『竹取物語』をふまえたとき、寝覚の上が詠んだ和歌の上句「天の原雲のかよひ路とぢてけり」とは、単に「雲のかよひ路」が閉ざされるのではなく、「もの思ひなき」世界への道を「とぢ」られるという寝覚の上の暗い未来を告げるものとして機能することを指摘した。

続いて、第一部の終盤には冒頭部分と同じ構図の場面（月の夜、寝覚の上の楽の音を聞いた父君が、寝覚の上を賞賛するという構図）が設けられ、この予言との照応が示されること、そこにも再び「とづ」が現れることを指摘した。両場面の構図の重なりとズレに目を向けると、これまであまり注目されることのなかった「とぢてけり」という歌を有する冒頭部分三年目の場面は、寝覚の上の運命を示唆するのみならず、その後訪れる第一部の悲劇の内実とも深く関わっていることを明らかにした。

続く失われた中間部分（第二部）において寝覚の上の苦悩が、第一部同様に「とづ」という表現を伴うものであったかは、残存資料からは残念ながらわからない。だが、第三部では、寝覚の上がくりかえし抱く現世離脱への願いが、第三者によって「とぢむ（閉ぢむ）」と表現されていることは見過ごせまい。その後、彼女は失われた結末部分（第四部）で出家を果たすことになる。こうした展開を見通したとき、いささか図式的になることを恐れずに言えば、『夜の寝覚』という作品は、残酷な運命の手によって大切なものを「とぢ」られてきた寝覚の上が、やがてこの世との断絶を願って彼女自ら「とぢ」ようとして、さらなる苦悩を抱える物語として捉えられるのではないか。

さらに、欠巻部分の内容を示す残存資料の存在（『風葉和歌集』）によって、失われた結末部分には出家した状態を示す「とづ」を確認できたことは看過できない。つまるところ、この「とづ」という表現が一つの軸となり、失われた第四部世界と繋がりゆく可能性も浮かびあがってくることを明らかにした。

（２）他作品との関わり

『夜の寝覚』の欠巻部分の検討を行うことと平行して、他作品との関わりを観点とした考察も行うことを試みた（（１）の成果は『竹取物語』を視野にいれたものという点で、こちらにも該当すると考える）。こうした考察を行うのは『夜の寝覚』を最終的には王朝物語史に改めて位置づけることを目的とするからである。

『夜の寝覚』において物語を貫く軸の一つに親子の愛情というものが挙げられる。冒頭場面からすでに寝覚の上の父大臣は、娘に対する過剰なまでの愛情を示しており、寝覚の上もまた母となってからは男君との間にもうけた子供達に慈愛のまなざしを注いでいる。これらの愛情は「愛し（かなし）」という言葉で表現されているのだが、親が子に対して抱く「愛し」という愛情表現はどの程度一般的であるのか、また特異な用い方をしている作品は見られるのかどうかを明らかにするべく、平安時代の文学作品全体の概観を捉える考察を行った。

「愛し」という語は上代と中古のみに活躍し、その後消えていった愛情表現である。二つの時代における用法の違いを国語学的観点に基づいて指摘するものがある一方、国文学の分野では、平安時代における「愛し」の概観を捉えたうえで作品世界との関わりを見据えながら分析・考察する論は管見の限り

見当たらない。よって、平安文学作品を広く網羅し調査したところ、『竹取物語』と『うつほ物語』において「愛し」が特徴的に用いられていることが明らかとなった。以下の成果は、「親子の愛情表現としての「愛し（かなし）」―『竹取物語』と『うつほ物語』の特異性―」（『人文科学研究』138）にまとめたものである。

「愛し」は『萬葉集』の時代では、恋人や夫婦といったように主として男女間で用いられるものであった。一方で、時代が下って平安時代になると「愛し」は、親と子・孫の間で使用されるようになる（その後、中世に至ると愛情表現としての「愛し」は用いられなくなり、かわりにこれまでにはなかった“貧しい”という意味が派生する）。

そこで、平安文学作品における「愛し」の用法を調査したところ、全体としては親から子・孫へといった用いられ方が多数を占めており、『夜の寝覚』の用法はこちらに含まれることが確認できた。これに対し、『竹取物語』と『うつほ物語』は、子が親に対して「愛し」という思いを抱いている。そこで両作品をそれぞれ検討することで、なぜそうした用い方をするのかを明らかにした。

つまるところ、『竹取物語』では人間界と天上界の隔絶を描こうとした点に、『うつほ物語』では孝の精神が物語を貫いている点に、一般的な用法とは異なる「愛し」が見られる要因があることを指摘した。

以上、平安後期文学の一つである『夜の寝覚』に焦点を当て、欠巻部分の内容を見定めることを通して、多角的な観点により考察を進めた。その結果、現存部分のみを対象とした断片的な考察では見えてこなかった本作品の特質を明らかにすることができた。また、他作品との繋がり／断絶といった点にも目を向けることで、わずかではあれ改めて作品の特徴を探ることができた。

とはいえ、欠巻部分の分析と現存部分の検討という、それぞれの分析によって出された成果を繋げたうえでの考察には、まだまだ検討の余地が残されていると言えよう。他作品を視野にいれた考察を平行して行いつつ、最終的には王朝物語史上にいかなる意義のもと位置づけることができるのか、さらなる考察が断続的に求められていると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①<u>高橋早苗</u>「親子の愛情表現としての「愛し（かなし）」―『竹取物語』と『うつほ物語』の特異性―」（『人文科学研究』138、査読無、2016・3、pp.1-21）

②<u>高橋早苗</u>「『夜の寝覚』冒頭部分の和歌とのちの展開―『竹取物語』を契機として―」（『国語と国文学』92、査読有、10、2015・10、pp.18-32）

③<u>高橋早苗</u>「『源氏物語』典拠研究の限界と可能性―若紫巻と司馬相如伝の関わりを事例として」（『中古文学』95、査読有、2015・06 、pp.35-45）

④<u>高橋早苗</u>「『源氏物語』夕顔巻の「家鳩」―〈回想〉の仕掛け―」（『人文科学研究』134、査読無、 2014・3、pp.1-23）

〔学会発表〕（計２件）

①<u>高橋早苗</u>“『源氏物語』典拠研究の限界と可能性―若紫巻と司馬相如伝との関わりを事例として―”中古文学会秋季大会シンポジウム、2014・10・11、京都女子大学

②<u>高橋早苗</u>“『源氏物語』夕顔巻の〈謎〉―「かのありし院に」という回想場面に着目して―”中古文学会秋季大会、2013・10・26、東北大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋 早苗（鈴木 早苗）（TAKAHASHI,Sanae）（SUZUKI,Sanae）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：１０６２５１２２

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：